

小中学生のインターネット視聴に対する親の介入について

水野 一成・近藤 勢津子・吉良 文夫
NTTドコモ モバイル社会研究所

小中学生のインターネット利用状況は、スマートフォン所有率の向上、GIGAスクール構想に連動し、タブレット・パソコンの利用が増えたこともあり、大きく増えた。2022年11月現在では小学生の47%、中学生の71%が1日平均2時間以上利用となっている。家庭でのインターネット利用時間増加に伴い、親がどのように介入しているか、定量調査結果を基に分析を行った結果、親の介入スタイルによって「共視聴/指示」「共視聴/制限」「低介入」の3群に分けることができた。なおそれぞれの群の構成比は、ほぼ均等となっている。「共視聴/指示」「共視聴/制限」を「高介入」群とし、特性を見ると、親子ともにインターネット利用時間が多く、親と子の会話時間が長い。さらに、子がスマートフォンを使うことに対し、親は遊びだけではなく、勉強の面もあると回答した割合が高い傾向が見られた。このことから、高介入群は普段の生活の中でインターネット利用が浸透していて、親の子がインターネットを利用することに関する考え方も多面的であることが推察された。

キーワード：インターネット、介入、スマートフォン、タブレット、親子関係、定量調査

1. 研究の背景・目的

スマートフォン（以下、スマホ）の所有率が小中学生においても上昇し、2022年11月現在では小学生で25%、中学生で76%に達している（NTTドコモ モバイル社会研究所2023）。さらにGIGAスクール構想が本格的に始まったことで、学校でのタブレット・パソコンの利用が大幅に増え、それに連動する形で家庭での利用も増えた（NTTドコモ モバイル社会研究所2023）。その結果、小中学生の学習以外でのインターネット利用時間は、小学生の47%、中学生の71%で1日平均2時間以上となっている。

それに対して、親は子が長時間インターネット利用することで、健康への影響や、個人情報漏洩など様々な不安を抱えている。小中学生でインターネットを日々の生活の中で多用するようになった中で、子がインターネットを利用する親はどのような関わりをしているのか、2022年11月実査の結果を基に分析した。

2. 研究の概要

2.1. 分析の流れ

- ①子がインターネットのサイトや動画を視聴する際に、親はどのように関わっているかを9問で調査
- ②①の結果を因子分析
- ③②で抽出された因子を基にクラスタ分析を実施
- ④③で作成された各クラスタの特性を判明するために、数量化理論第Ⅱ類を用いて分析

2.2. 調査概要

調査方法：訪問留置法

調査エリア：関東1都6県

調査対象：小中学生とその親

サンプル数：600（分析対象は子がインターネットを利用している567）

サンプリング：QUOTA SAMPLING,性,学年(3学年),都道府県,都市規模

調査時期：2022年11月

3. 調査結果

3.1. 単集計結果

子がインターネットでサイト・動画を視聴する時に親はどのように介入しているか調査結果を図1で示す。この設問は、Valkenburg (1999) らが子どものテレビ視聴に対する保護者の介入スタイルを、菅原ら (2018) が和訳したものを基に、栗原ら (2020) がテレビ視聴の部分インターネットに変える等としてICT版として作成したものである。利用してよい時間帯や利用時間など利用に関する制限的介入（図1：質問4～6）は他の項目と比較して高く、41%～64%となっている。また、子と一緒に見るなど共視聴（図1：質問7～9）に関する項目も54%～63%と半数を超えている。ただ、サイトや動画などに登場するキャラクターの真意・動機などの指示的介入は27%～47%（図1：質問1～3）であった。

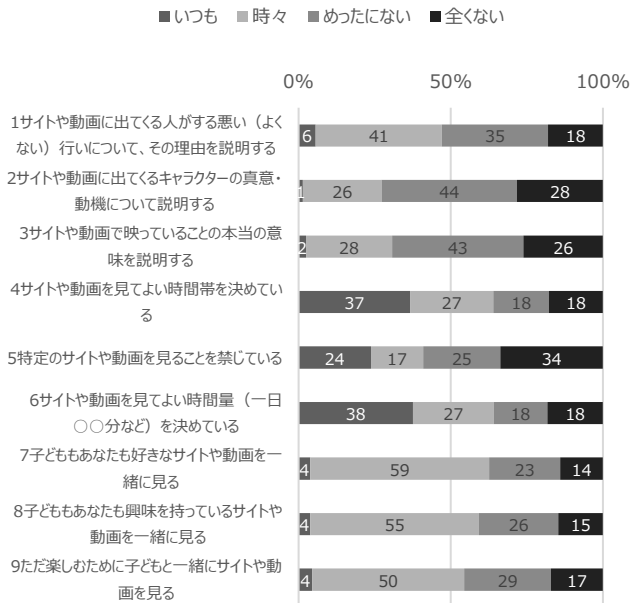


図1 子が見るサイト・動画への親の介入

3.2. 因子分析結果

子が見るサイト・動画への親の介入結果を基に因子分析を行い、その結果を表1に示す。

抽出方法は主因子法、回転法はバリマックス法で実施した。固有値1以上で抽出した結果、3因子を抽出。第一因子はサイトや動画を一緒に見るなどの項目の因子得点が高い「共有視聴」、第二因子はサイトや動画に映っていることの本当の意味を説明するなどの項目の因子得点が高い「指示的介入」、第三因子はサイトや動画の時間量の設定などの項目の因子得点が高い「制限介入」が抽出された。なお本稿では「共有視聴」「指示」「制限」と記すこととする。

表1 因子分析結果

	共有視聴	指示	制限
8子どももあなたも興味を持っているサイトや動画を一緒に見る	0.91	0.16	0.06
7子どももあなたも好きなサイトや動画を一緒に見る	0.89	0.18	0.07
9ただ楽しむために子どもと一緒にサイトや動画を見る	0.78	0.10	0.02
3サイトや動画で映っていることの本当の意味を説明する	0.14	0.85	0.10
2サイトや動画に出てくるキャラクターの真意・動機について説明する	0.13	0.84	0.17
1サイトや動画に出てくる人がする悪い（よくない）行いについて、その理由を説明する	0.16	0.71	0.23
6サイトや動画を見てよい時間量（一日〇〇分など）を決めている	0.00	0.07	0.84
4サイトや動画を見てよい時間帯を決めている	0.03	0.13	0.74
5特定のサイトや動画を見ることを禁じている	0.08	0.23	0.46

太字は因子得点0.30以上

3.3. クラスタ分析

抽出した3因子を基にクラスタ分析を実施した。その結果、表3の通り、3クラスタに分けることにした。第一クラスタは、共有視聴及び指示因子の得点が正の方向に高い傾向が見られたため「共有視聴/指示」と命名した。第二クラスタは、共有視聴の因子得点が高く、やや制限も高い得点傾向が見られたことから「共有視聴/制限」と命名。第三クラスタは高い得点の因子は見られなかったため「低介入」と命名した。それぞれのクラスタの構成比は凡そ均等であった。

表2 クラスタ分析結果

		共有視聴/指示	共有視聴/制限	低介入
因子	共有視聴	0.53	0.62	-1.08
	指示	0.77	-0.80	-0.07
	制限	-0.21	0.23	0.01
構成比(%)		35	30	35

太字・・因子得点0.3以上 斜字・・因子得点-0.3以下

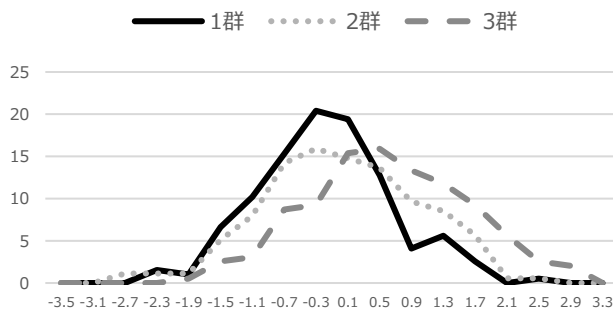
3.4. 数量化理論第Ⅱ類の分析結果

上記で得られたクラスタの特性を分析するために、数量化理論第Ⅱ類で分析を行った。目的変数は3クラスタより「1群：共有視聴/指示」「2群：共有視聴/制限」「3群：低介入」とした。説明変数は子の属性、子のICT利用環境、ICTスキル、親の属性、子のICT機器を利用することへの親の考えなど12変数で分析を行った。

まず、モデルの適性をみる。判別率的中率は76.0%、1軸の相関比 $\eta^2=0.11$ 、2軸の相関比 $\eta^2=0.05$ と高くはないが、偏相関係数の高低、カテゴリースコアから一定の傾向は見られたため、その点を中心に言及する。なお本稿では2軸の相関比が低いため、1軸のみの報告とする。また1軸の寄与率は69.8%となる。

1軸の解釈であるが、各クラスタの平均値及び判別グラフ（図2）より「1群：共有視聴/指示」「2群：共有視聴/制限」と「3群：低介入」を分ける、つまり「高介入」と「低介入」を分けると考えた。なお、平均値よりカテゴリースコアが負の方向に振れるほど「高介入」傾向、正の方向に振れるほど「低介入」傾向である。

図2 判別グラフ



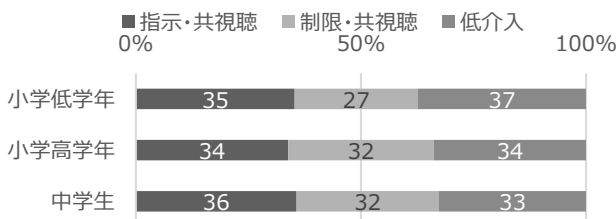
1 軸の偏相関係数の高い順に説明変数を並び替えたのが表3である。「子のネット利用時間（学習時間を除く）」が最も高く次いで「家庭における親と子の会話」と続いた。相関が低い変数としては「性別」や「学年」など「子の属性」に関するものであった。

アイテム名	偏相関係数	順位	レンジ	順位
子のネット利用時間（学習以外）	0.17	1位	1.57	1位
親と子会話	0.16	2位	1.32	3位
親のスマホの考え方	0.12	3位	1.38	2位
親のネット利用時間（仕事以外）	0.11	4位	1.06	4位
母親の年齢	0.09	5位	0.52	5位
子のICTスキル	0.06	6位	0.49	6位
子の家庭で過ごす一人の時間	0.06	7位	0.42	7位
子のスマホ所有	0.05	8位	0.37	8位
子の性別	0.04	9位	0.25	9位
子の学校の成績	0.03	10位	0.22	10位
親のパソコンの考え方	0.03	11位	0.19	11位
子の学年	0.01	12位	0.13	12位

表3 説明変数の偏相関係数

「学年」は単純に目的変数とクロス集計（図3）を行うと低介入は学年が低いほど割合が高くなっているが、他の変数で調整され、偏相関係数は低い。

図3 学年別クラスタ分布



ここからカテゴリースコア（図4）から特性を読み取っていく。最も偏相関係数が高い「子のネット利用時間（学習時間を除く）」を見ると、2 時間程度の利用時間が最も「高介入」傾向であった。また、30 分程度とかなり少ない層は「低介入」である。次に偏相関係数が高い「親と子の会話時間の多寡」を見ると、会話時間が長いほど「高介入」傾向であった。高介入群の多くの親子は、サイトや動画を一緒に見ている。直接回答は得てい

ないが、親子の会話が多い事と相関が見られたことを鑑みるに、サイトや動画を見ながらの会話や、見たことを基にした会話をしている可能性がある。そうした場合、親子のコミュニケーションの中に、インターネットが浸透していることが伺える。

次に高い偏相関係数であったのは「子がスマホを利用する事への親の考え」である。これは、子がスマホを「勉強のツール」「遊びのツール」それぞれについて、どのように考えているか、4 件法で聞いた。その結果を得点化し、どちらの得点が高いかによって「勉強利用傾向」「遊び利用傾向」に分けた。カテゴリースコアを見ると、スマホは「勉強のツール」と考える親ほど、「高介入」の傾向であった。4 番目に高い偏相関係数は「親のインターネット利用時間（仕事での利用は除く）」であり、親の利用時間が長いほど「高介入」傾向である。

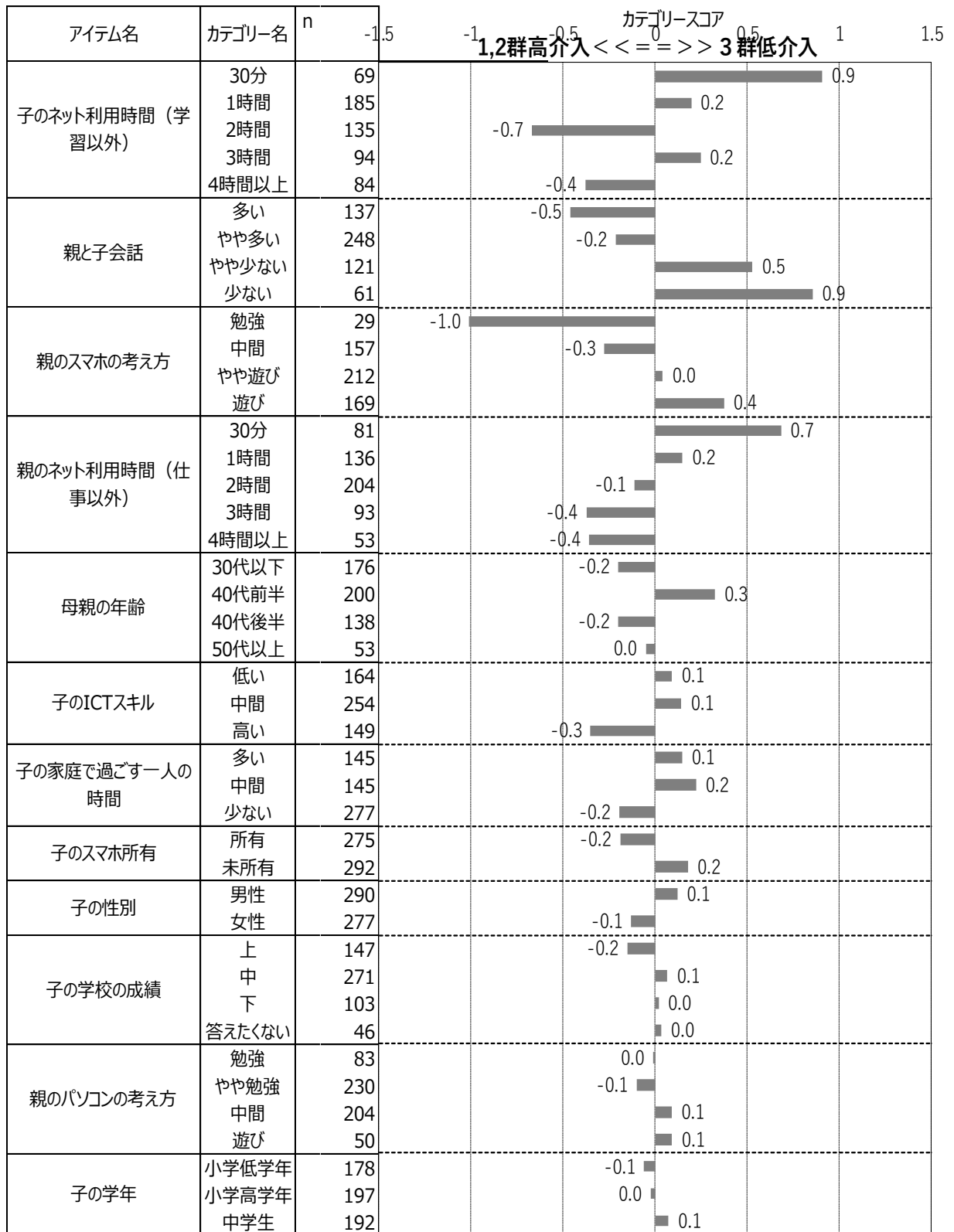
4. 考察

今回の結果から、親子ともにインターネット利用時間が長く、親子の会話が多いほど「高介入」傾向であった。このような親子の特性として、普段の生活の中に、インターネット視聴が浸透していることが伺える。また、「高介入」傾向がある親はスマホへの考えが単に遊びのツールだけではなく、勉強でも使うツールという傾向が見られた。インターネットの視聴を通じて、知的行動との関わりも考えられる。インターネットの利用については、多くの親が様々な悩みを抱えている。その解決の一つに、親子で一緒に利用することがどのように役立つか、今後の分析で明らかにしていきたい。

参考文献

- NTT ドコモ モバイル社会研究所ホームページ
(2023. 2. 27, <https://www.mobaken.jp/project/children/kodomo20230216.html>)
- NTT ドコモ モバイル社会研究所ホームページ
(2023. 2. 27, <https://www.mobaken.jp/project/children/kodomo20220511.html>)
- Valkenburg, P. M., Krcmar, M., Peeters, A., & Marseille, N. M. (1999). Developing a scale to assess three styles of television mediation: “restrictive mediation,” “instructive mediation,” and “social coviewing.” *Journal of Broadcasting and Electronic Media*, 43, 52–66.
- BPO 青少年委員会 (2018). 「青少年のテレビ・ラジオに対する行動・意識の関連要因に関する横断的検討」調査研究報告書, 41–48. <https://www.bpo.gr.jp/?p=9470> (2020 年 8 月 20 日)
- 日本社会心理学会第61回大会 (2020) 「モバイルライフスタイル研究2-保護者の介入スタイルと小中学生のICT利用の関係-」発表論文集, 175

図 4 カテゴリースコア



Parental Intervention in Internet Viewing by Elementary
and Junior High School Students

KAZUNARI Mizuno(NTT DOCOMO Mobile Society
Research Institute)

SETSUKO kondo(NTT DOCOMO Mobile Society
Research Institute)

FUMIO KIRA(NTT DOCOMO Mobile Society Research
Institute)